
俺と犬耳と猫耳と植物とテラフォーミング

泡 照名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と犬耳と猫耳と植物とテラフォーミング

【Nコード】

N4900Y

【作者名】

泡 照名

【あらすじ】

拾った犬が、人になったんですけど、どうしたらいいんでしょうか？

どうしてこうなった

虹のかかった空の下。

俺は友達と下校していたが今はそれぞれの帰り道に分かれ、一人で歩いている。

そんなとき、ゴチンっ、と言う音を立てて、額が電柱にあたって、その衝撃で尻もちをついた。

周りに誰かが見ていなかったから良いものの、かなり恥ずかしい。クスクスと、どこからか笑い声が聞こえる。

声の主の場所は分からないが、目の前に、捨てられた犬が、段ボールに入っているのが見えた。

「拾ってあげて下さい。名前はクアンです」——段ボールにそう書いてあった。

うちの家では猫を一匹飼っている。今更、動物が一匹増えようと変わりはないだろう。

「クアン……うちに来るか？」

「ワウっ！」

犬は、頷いた。まるで俺の言葉を理解しているようだった。

「よしっ」

俺は、段ボールを持ち上げて、家に持ち帰った。

「ただいまー」

声は帰ってこない。じゃあ何でドアが開いてたんだ？

俺は、犬を洗うために、段ボールを持ったまま、風呂場に向かった。

そして、風呂場のドアを開けると、そこには妹がいた。

——糸纏まとわぬ姿で。

「おかえりー。にー」

「お前は恥じらいというものを持てっ！」

「にーになら見られてもいいよ。近親相姦も悪くないよ?」

「ワウッ! ワウッ!」

犬が俺と妹の間に割って入るように吠えた。

「にー、それ何?」

「クアンって名前らしい。拾ってきたんだ」

「にーは優しいね」

今更だが、『にー』と言うのは俺のことだ。

そして、俺のことを『にー』と呼んでいるのが妹の対枝ついでだ 柚弓ゆゆみ。

今はしていないが、いつもは綺麗な黒髪を纏まとめて、後ろに流している。

そして何よりの特徴は重度のブラコンだ、ということだ。

俺のベツトに勝手に潜り込んできたり、俺が風呂に入っている時に入ってこようとするのは日常茶飯事。

最近は既成事実を作ろうと目論らんでいるらしい。

そして俺は、対枝ついでだ 瀬らい。

常人より少しだけ動物などの可愛いものが好きな普通の高校生、だと思う。

「可愛いね。この犬。でも——」

「俺うちたちの家で世話できるか、って言いたいのか?」

「うん」

「——まあ、それは服を着てから話そうか」

「ええ——」

「何で不満そうなんだよ」

「ワウっ!」

「ほら、早く服着てくれ。泥だらけなこの犬がかわいそうだと思うのか」

俺は、柚弓に犬を見せつけた。

すると柚弓が小さな声で何かを呟いた。

「兄に好意を感じ取ってもらえない妹はもっとかわいそうだと思わ

んかね」

「何か言ったか？」

「何も言っていないよ。にー」

何故か柚弓が不機嫌になった。

俺、何か悪いことしたか？

俺は犬をバスタオルでガシガシと拭いていた。

ふと、犬が入っていた段ボールを見る。

中には『Hーフード』とプリントされたドッグフードが入っていた。

「これをこの犬に食わせろ、って飼い主は言いたいのか？」

まあ、ありがたい事だ。うちにドッグフードは無かったからな。

俺はクアンに首輪をつけた。

これでクアンも家族の一人だ。

俺は袋の封を破り、Hーフードと書かれたドッグフードを皿に入れた。

「ほら、食え」

クアンはドックフードを食べ始めた。

俺は目を閉じ、クアンの食費など、クアンが来たことで何が変わるか考えてみた。

目を閉じてから、数秒で肩を叩かれた。

俺はゆっくりと目を開いた。

目の前には見知らぬ犬耳を付けた可愛い女の子の顔が見えた。

何だ。女の子か……女の子？

視線を下にそらすと、首輪が見えた。

そして更に下にそらす。

ふくらみの乏しい胸。

……あれ？

「拾ってくれて、ありがとう。私はクアンだよ」

……どうしてこうなった……。

「にー、衝動が抑えられないよ。あの子、しばいていいかな？」

「やめとけ」

クアンは着心地が悪いのか、もぞもぞと鬱陶しそうな顔で肩を動かした。

「仮にもお前が俺の拾ってきた犬だとして、何で人になれたんだ？」

「ドックフードだよ。『Hーフード』」

「そのドックフードに何か不思議な力があったのか？」

「『Hーフード』はヒューマンフードの略。あれは色々な生物を人化させる食べ物だよ」

「……」

「そんな食べ物があったら、色々と危険じゃない？」

バイオハザード
生物災害とか起きたりしないかな？にー」

「そうだな。早く捨てないと……」

俺はあたりを見回した。……無い。

あの謎の食べ物が無い。

「そういえば、さっきミオがこの辺をうろちよろしてたけど」

ミオと言うのはうちの飼猫だ。

「まさか……」

俺はあわてて庭に向かう。

庭にはあの謎の食べ物と猫耳少女が一人、そして頭に花を乗せた少女が一人。

もちろん全裸である。

「二人……？一人なら分かるけど……。あれ……一人多くないか？」

責任とってもらうからねっ！

よく考えてみる。俺。眼を閉じて深呼吸して、落ち着いて考えてみるんだ。

……あれ、どうしたんだろう。やっぱり、クアンも合わせて三人だ。まず犬耳の娘はクアンが人化したとして納得できる。

まあ、納得してよいものかは別として……猫耳の娘も、うちの飼った猫のミオが人化したとして、頭に花を乗つけたこの娘は誰だ？

——いや、初^{ういは}●とか言うな。

黒髪だけど、髪長^{ういは}いし、●春^{はる}ではない。多分……。

「で、どうするの？ 瀬？」

犬耳の少女（多分クアン）が俺に抱きついてきた。

後ろで柚弓が禍々^{まがまが}しいオーラを出しているのは気の所為だろう。

気の所為であって欲しい。いや、気の所為でないと困る。

「にー。こいつ殺すよ。まともな死に方させないけどいいかな？」

気の所為じゃなかったようだ。

「やめとけ。こいつは多分、クアンだ」

「じゃあ、まともな死に方だけはさせるから」

「いや、殺すな、と言ってるんだ」

「で、にー。あの娘、誰？」

柚弓は猫耳の少女を指差した。

「あれはミオだろ」

「じゃあ、あの娘は？」

柚弓は頭に花を乗つけた女の子を指差す。

その女の子は一応、ベランダに干してあった服を勝手に着ていた。

一応、常識はあるようだ。

……勝手に人の服を着ているところは常識なのかというのは聞かないでほしい。

「俺が聞きたいぐらいだ。誰だ、あの娘？」

思考をフル回転させるんだ俺。

つまり、頭に花があるってことは、花が人化したってことか？

あれ？やたらと単純だけど信じたくないな。

「あれ、にーが育てていたラベンダーじゃない？」

「あ、ああ」

現実逃避してたのに、柚弓の言葉で一気に現実に戻されたよ。

「どうすんの？にー」

「どうするよ」

「いや、あたしに聞かれても……」

「……うちで世話するしかないよな」

「……にーは優しすぎるよ。普通の人ならとりあえず警察に通報するよ？まあ、にーのそういう所が私は異性として好きなんだけどね」
異性としてはまずいと思うが。

「でも、警察に通報したらこの娘達はどうなるんだ？殺されて解剖かいぼうでもされたら……」

「考えただけでもぞっとするね」

「すいません」と、不意に後ろから声をかけられた。

後ろにいたのは頭に花を乗つけた女の子だった。

「何故『ニンゲン』の体になっているんですか？私は」

「何故と言われてもな……」

「この食べ物だろうね」

猫耳少女（多分ミオ）もいつの間にか服を着て、Hーフードの包装紙を持っていた。

「つまり、誰の所為でしょうか？」

頭に花を乗つけた少女の発言を機に全員が俺を見た。

「あれ？俺の所為？」

そもそも俺が悪いのか？

「責任とってもらうからねっ！」

猫耳少女が俺に言った。

責任を取るって、何をされるんだ？

何とかなるだろ（前書き）

更新遅れてすみません。

受験生ですので、ちよいとテスト勉強を……。

まあ、受験生がこのサイトで何やってんだって話ですけど……。これからもこの駄文を読んでいただければ幸いです。

何とかなるだろ

「責任って、具体的に何をすればいいんだよ？」

「うーん……」

ミオ（仮定）は腕を組んで唸った。

「色々」

「具体的に聞いてるんだが」

腕を組んで考えた結果がそれかよ。

「私たちを、養^{やしな}うというのはどうでしょう？」

頭に花を乗つけたラベ・ンダ子（あだ名）が、言った。

「いや、ラベ・ンダ子さん……」

「誰がラベ・ンダ子ですか。私はハナです」

「見たまんまだな」

「私もだよ」

クアンが手を挙げて、言った。

「『クアン』は中国語で、犬って意味だから」

「作者の豆知識を代弁してくれてどうもありがとう」

「話はそれでしたが、私の質問の答えはどうなんです？ ブサ・イ

ク男さん」

反撃を仕掛けてきやがった。

「そうだな……お前はどうか？ 柚弓」

「うーん。爪をはがすかな？」

こいつ、どうやってこの娘^こたちを痛めつけるかを考えてる。

柚弓に決定権をゆだねたら駄目だな。

「……まあ。何とかなるだろ」

「やったあ！ 瀬、大好き！」

クアンが俺に抱きついてきて、顔を舐めまわす。

犬だからだろうけど、人間の姿だからこれはまずいだろ……ん？ 二つの殺気……。

「にー……何で抵抗しないのかなあ？」

「瀬……分かってるよね。私たちに何されるか？」

柚弓とミオが凶悪なオーラを出して俺を見る。

「何で、怒りの矛先ほしなめを俺に向けるんだ？」

「まあ、とりあえず、普通に過ごすにしても服とか要りますね」

ラベ・ンダ子もとい、ハナが話を逸らしてくれた——親切で話を逸らしたのか、興味が無かったのかは分からないが——おかげで、二人の怒りは収まった。

「そうだね。私の服を貸すにしても、サイズが合わなかったりするだろうし」

柚弓はハナの体（特に胸のあたりを）を見て、溜息をついて言った。

「古着屋に……」

「デパートに行こう！」

柚弓が俺の言葉を遮さへぎった。

「値段とか考えて……」

「新しい服買いたかったんだよね」

柚弓が目をきらきら輝かせて、さらには鼻歌まで歌いだしやがった。

「ねえ。にー。デパート行こう！」

「顔が近い」

「ねえ。いいでしょ！」

この目で見られたら……断れねえよなあ。

「分かった、分かった。」

食費、生活費、ガス代、電気代、水道代、e t c. ……

今月の仕送り、大丈夫か？

……まあ、何とかなるだろ。

何とかならなかったら、なるようになれだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4900y/>

俺と犬耳と猫耳と植物とテラフォーミング

2011年12月1日21時53分発行